

遠き花火

谷田貝常夫

文語日記 平成二十五年七月

酷暑續きたる後、戻り梅雨がごとき態となりて、今年七月二十七日の隅田川花火大會、大雨警報出でて中途にて中止となる。

花火と聞かば蕪村の「もの焚て花火に遠きかゝり舟」の句浮び、その句と關はるかゝり舟の情景の蕪村畫想像せられて、靜謐なる花火を楽しむ世界への親しみ感ずるを常とせり。同時に、余は下町育ちなればいはゆる兩國の川開き、今時の呼び名なれば隅田川花火大會につき幾つか思ひ出すことあり。

戦後のことなれど、大川に程近き柳橋に住む友人に招かれ、川開き當日に、老も若きも混じりたる客にあふれしその宅を訪れしことあり。されど窓に集ひて眺むるも、方向偏りて花火のあがるを見ること少なく、さなきだに花火の煙のあたりの町竝一面に色濃く漂ひて、煙とそれに伴ふ花火の匂ひとを肌感ぜしのみにて了はりたり。

その後亞米利加の友人、日本人の妻を伴ひて久方ぶりに來日すれば、川開きにその娘達と共に花火舟に誘ひ、神田川より大川に出づ。いまだ明るきより多くの小舟蝟集し、まづは間近き音物の晝花火におどろかさる。日の暮るゝにつれ夜の花火華やかにあがり始む。されど、藏前橋よりかみの花火はともかく、打上げの近きによりて首のあげつづけとなり、無理の姿勢を強ひらる。時間もたち、最後の仕掛花火のナイヤガラとなるに及び、ぢきに煙の川面を流れ始めて、仕掛を見るものは、觀客の息のつまれるほどとなれり。

或る年、招待を受けて横濱港の花火を見しことあり。會場の眞横の特等席ともいはるべきビル内の料亭にて、全面の硝子越しに華やかなる花火の、絶えまなく打上げらるゝをすべて眺めらる。されど、ここには、音も傳はらず、花火の匂ひもなし。スクリーン上に花火の動畫、寫れるに變らず。

かくて余もの思ふ。幼かりしときの、下町の物干臺にて見し、近くもなき花火なり。間遠に夜の花火あがるたび、あちこちの物干臺に待ち受けたる大人子供の「かぎやあ」「たまやあ」と叫ぶ聲、つれてこちらも意味はわからぬながらに眞似て聲をあぐ、「かぎやあ」「たまやあ」と。今もことに觸れて目に浮ぶ花火見物なりき。後年、佐藤春夫の詩を知るに及びて、「人妻と二人」とはゆかねど、穉きときの花火に懷舊の念一段と起る。

「遠き花火」(殉情詩集)

つつましき人妻とふたりゐて

屋根ごしの花火を見る――

見出でしひまに消えゆきし

いともとほき花火を語る